

# 普通科と専門学科を併設する知的障害特別支援学校高等部におけるカリキュラム・マネジメントの現状と課題

—全国 32 校の併置校を対象とした質問紙調査の結果から—

○菊地 一文

工藤 清和

（弘前大学大学院）

（弘前大学教育学部附属特別支援学校）

KEY WORDS:教育課程, カリキュラム・マネジメント, 年間指導計画

## 1. 目的

特別支援学校高等部学習指導要領等の公示により、多様な学びの場の教育課程との連続性、重度・重複化、多様化への対応、卒業後の自立と社会参加に向けた指導の充実が求められている。本研究では、普通科と専門学科を併設する知的障害特別支援学校高等部（以下、併設校）におけるカリキュラム・マネジメントの現状と課題を把握することを目的とした。

## 2. 方法

全国の併設校 32 校に対して、「教育課程等」「学校研究等」「カリキュラム・マネジメント」「年間指導計画の作成及び検討」等の項目で構成する質問紙調査を実施した。

### （1）調査対象及び調査方法

全国特別支援学校校長会（2019）の実態調査データと都道府県教育委員会等のホームページに掲載されている高等部入学者選抜要項等をもとに、併設校 32 校を対象校として抽出し、質問紙を郵送した。なお、併せて学校要覧や年間指導計画、シラバス、校内研究のまとめ資料、その他教育課程編成に関する資料の提供を求め、記載内容を分析した。

### （2）回収状況

対象とした併設校 32 校のうち、18 校から回答があり、回収率は 56% であった。得た回答について単純集計した。

## 3. 結果

### （1）教育課程等について（ $n=18$ ）

設置経緯は、普通科に専門学科を新設 9（50%）、すべて新設 7（39%）、専門学科に普通科を新設 2（11%）であった。

生徒が学科を越えて共に学ぶ機会について、あり 17（94%）、なし 1（6%）であり、教科等の内訳は、学校行事 17（94%）、生徒会及び委員会活動 16（89%）、部活動 14（78%）、座学を中心に行う進路に関する学習等 4（22%）、国語、数学などの共通教科 3（17%）、専門教科や作業学習などの作業活動 0（0%）、その他 4（22%）であった。その他には、音楽・美術・保健体育・総合的な学習の時間等が挙げられた。

普通科のいわゆる軽度知的障害の生徒を対象とした類型（以下、軽度類型）に在籍する生徒と専門学科に在籍する生徒の実態について、一般的な実態が 1 をより困難、6 をより良好とした場合、どの状態に当てはまるか尋ねた結果を表 1 に示す。専門学科の生徒の自己肯定感と生徒指導が普通科の軽度類型の生徒と比べて低い値となった。

表 1 生徒の実態

	普通科軽度類型 ( $n=14$ )		専門学科 ( $n=16$ )	
	平均値	SD	平均値	SD
学習面	3.50	0.82	4.06	0.75
態度面	3.86	0.99	4.38	0.78
自己理解	3.07	0.59	3.63	0.70
自己肯定感	3.57	0.62	3.38	0.86
生徒指導	3.50	0.91	3.13	0.99
職業適性理解	3.21	0.67	3.94	0.66

普通科と専門学科の職員室は、一緒 15（83%）、別々 3（17%）であり、学科を越えて教員が指導を行う教科は、あり 11（61%）、なし 7（39%）であった。内訳は、ほぼ全教科 5、普通教科全般 4、技能教科等 2 であった。

学科を越えて教員が授業について話し合う場面について、設定している 8（44%）、設定していないが適宜話し合っている 7（39%）、設定していない 3（17%）であった。

学科併置のメリットとデメリット（自由記述）については、メリットとして中学生の進路選択の幅が広がること、生徒の実態に合った授業内容を展開できること、学び合いや助け合いで生徒の人間関係が広がること、就労に関する専門性の高い教員が専門学科に配置されること等が挙げられた。デメリットとして入学選抜での生徒の適性判断が難しいこと、同一障害で優劣を決めているようになること、校則等の基準が曖昧になること、どちらかの学科に重点が置かれてしまう可能性があること、相互に影響し合うため各学科の独自性を発揮しづらいこと等が挙げられた。

（2）学校研究等について（ $n=18$ ）  
研究主題等は、新学習指導要領への対応に向けた、社会に開かれた教育課程やカリキュラム・マネジメント等の取組に関するものが多かった。研究課題のキーワード（複数選択）は、育成を目指す資質・能力 9、キャリア教育・キャリア発達 8、主体的・対話的で深い学び 8、カリキュラム・マネジメント 7、教科等横断 5、その他 3 であった。

### （3）カリキュラム・マネジメントについて（ $n=17$ ）

カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）のための研修実施について、実施 10、未実施 5、実施予定 2 であった。教科等横断的な視点での取組の状況を表 2 に示す。

表 2 教科等横断的な視点での取組

項目	全校	学部	学科
1 単元配列表等を作成	4	—	4
2 職員室に今月の授業一覧表等を掲示	4	—	2
3 資質・能力や育てたい力を共有	12	1	3
4 指導案等に関連する教科等を明示	7	1	1
5 単元・題材計画に関連する教科等を明示	4	—	5
6 年間指導計画に関連する教科等を明示	5	1	3
7 その他	2	—	—

### （4）年間指導計画の作成及び検討について（ $n=32$ ）

年間指導計画の作成と活用の工夫及び課題について、学科、類型等ごとに自由記述で回答を求めた。3 年間のシラバスを基に、指導目標・内容の一貫性・系統性を把握後、年間指導計画や単元配列表を作成し、授業を行う等の工夫が見られた。課題としては、シラバスとの一本化によって指導内容や評価が曖昧になってしまうこと、前年度踏襲や形骸化しないように随時検討する必要性等が挙げられた。

## 4. 考察

併設校におけるカリマネは、学校研究等と関連付けて取り組むほか、既存の作成書類や会議の活用を通して情報共有し進める過程にあることが推察された。その具体例として、資質・能力や育てたい力の再確認と共有による年間指導計画等への反映や、教科会等で年間指導計画の共有を図り、指導目標や指導内容の検討、調整などが挙げられた。

課題としては、年間指導計画立案後の単元の実施過程における検証と共有が挙げられた。また、専門学科では教科等の指導を一人で行うことが多いため、複数の教員で検討する機会を設定する必要性やその難しさが指摘された。これらのことから、改めて学校全体を俯瞰した組織的・計画的取組を進めるためのシステム構築が必要であると考えた。

（KIKUCHI Kazufumi, KUDO Kiyokazu）